

学長 インタビュー

国立大学法人
鳴門教育大学
やました かずお 学長
山下 一夫

教える自信と学ぶ謙虚さ“感じる心”を備え
「チーム学校」で助け合える教師を養成する

鳴門教育大学は昭和五十六年に新構想の教員養成大学として開学しました。「二十一世紀におけるグローバル社会を主体的に生きる人間を育成し、文化の創造及び国家・社会の発展に貢献する大学——教育に関する高度な専門性と実践的指導力を身につけ、豊かな個性をもった教師を養成する——」をモットーに、二十一世紀に活躍する教員の養成を行っています。

今回のインタビューでは、本年四月に学長に就任されての抱負、鳴門教育大学の特色ある取り組みを中心にお話を伺いました。

現職の先生方と徹底的に事例を検討

先生の専門は臨床心理学ですが、教育系大学の教員として昭和六十三年十月に着任されました。教育のための新構想大学の教員として考えたことから伺います。

学長 私は臨床心理学の専門家としてプロのカウンセラーであるという自負があるわけですが、赴任して最初の大学院の授業で、カウンセリングについて話を聞いて、院生である現職の先生の心に言葉が届いていないと感じたんですね。ようするに、「それが学校現場にどれだけ役に立つの？」ということ

を、それぞれ現職の先生が内心感じているのがわかるんです。表面はみんな頷いてくれますし、受容的に聞いてくれます。でも、「どうも、ズレているな」と。

それで、プロのカウンセラーとして学校現場にどうしたら役に立てるのかというようなことで数年間悩みながら、徹底して事例検討会をやったんです。本学は新構想の大学なので、当時から現職の先生がたくさんいましたから、こんな生徒指導で悩みましたとか、こういう指導をしたけどどうだろうかとか、現

職の先生方にどんなことで悩んでいるのか、実際に悩んでいることを出してもらって、それなら、こういう見方があるけどどうだろうか、いろいろな話し合うわけです。数年間のそうしたディスカッションを基にして、学校教育に役立つカウンセリングの基本的な姿勢や考え方、技法といったことを授業でできるようにしたんですね。

現場の先生方と一緒に事例を検討することで、本当に学校現場で役立つ生徒指導を一緒に考え、あるいは自信を持って教えられるようになりました。事例検討会は本当に勉強になりましたし、教員をしている間ずっと続けられました。

スクールカウンセラーとして 約十年、直接、学校現場を知る

平成七年にスクールカウンセラー制度が導入されました。

学長 スクールカウンセラー制度が導入されて、徳島県で三人スクールカウンセラーが

選ばれるのですが、三人とも本学の教員でした。私はそのうちの一人で、週一回、中学校に行きました。そこで直接、学校現場を知る

「チーム学校」の一員として学校現場を経験

——学校現場はいかがでしたか。

学長 はじめは、お手並み拝見みたいなところもありましたが、私の場合は大学で生徒指導を教えてきたこともあって「現場のことを頭ではわかっていてるようだ」というふうに先生方は思ってくれていたみたいです。

特に、最初の赴任先の校長先生がとても優れた方で、スクールカウンセラーをうまく活用してくれたんですね。それで先生方ともうまく連携できました。不登校や非行などいろいろな課題がありましたけど、それを包み隠

ことができたことは、私にとって非常に大きかったですね。約十年間、スクールカウンセラーを務めました。

さずに話してくれましたし、保護者会があれば、今日は鳴門教育大学のスクールカウンセラーの先生も同席してくれていますとアナウンスしてくれたり。

子どもが話しやすい雰囲気が大切

学長 たとえば、今でもよく覚えているのが、はじめの問題が当時もあって、はじめをなくすために生徒会の子どもたちがアンケート調査を実施したんですね。実際は先生方が

バックで支援しているんですけど。

この中学校のユニークなのは、そのアンケートを基に、保護者と教師と生徒会の子どもたちが集まって話し合いをしたのです。項目も少ないので、話し合いはとんとんと進むのかと思ったら、保護者に対する子どもたちの要望という自由記述があって、自分たちの話を聞いてほしいという回答が圧倒的に多かったんです。ところが、ある保護者がそれを見て、おかしいというんですね。いじめられていないかとか、学校でどうしているんだと聞いても子どもたちは答えないと。ほかの保護者からも、うちもそうですと。話を聞いてほしいと言うけど、子どもたちは話してくれないと。そこで生徒会長の女の子が言ったのは、いじめられているとかいえないかとか、急にそういうことを聞かれても答えられないと。話を聞いてほしいというのは、普段の何気ない会話をしたいということなんです。食事のときや食後のくつろいでいるときに、学校でこんなことあって、とか、ちょっとした雑談を聞いてほしいと。なのに、親は、忙しい、忙しい、早く勉強しろ。そこがズレているというんですね。つまり、いかに話しやすい雰囲気が大切かということなんです。

私もスクールカウンセラーとして、子どもたちの話を聞くために、アイドルグループの名前を覚えたりしました。子どもたちの興味のある話題をきっかけにして、話しやすい雰囲気にしてから、核心に入っていくというようなことがいかに大事かということです。



山下 一夫 学長

昭和28年3月16日生まれ
昭和52年3月 京都大学教育学部卒業
55年3月 同 大学院教育学研究科教育方法学専攻修士課程修了
58年3月 同 博士課程単位取得退学
平成11年3月 博士（学術）（大阪市立大学）

昭和61年5月 京都大学教育学部助手
63年10月 鳴門教育大学学校教育学部講師
平成2年4月 同 助教授
10年4月 同 教授
13年5月 兵庫教育大学大学院連合学校教育学専攻教授（併任）
18年4月 国立大学法人鳴門教育大学学長補佐（教育連携担当）
20年4月 同 大学院学校教育研究科教授
22年4月 同 理事・副学長（社会連携担当）、
副学長（国際交流担当）
27年4月 いじめ防止支援機構長
28年4月 同 学長

プロ同士がいかに連携していくか

—学校現場で一番印象に残っていることは何ですか。

学長 あるとき暴走族風の集団が体育館の裏にたむろしているということで、先生方がみんな、これは一大事だと出て行くわけです。私も後ろについて行ったのですが、金髪の暴走族風の男女十人くらいがこちらに眼を飛ばして、一触即発の状態です。

どうなることかと見守っていると、先頭にいる生徒指導の先生が穏やかな声で「あ、顔、覚えてるよ。うちの中学の出身だろう」「あ、君もそうだろう」と話しかけて、子どもたちが意表をつかれているうちに彼らの横に自分もしゃがみこんで「どうしたの」というようなことを穏やかに語りかけるのです。ほかの先生方も一斉に同じようにして語りかけるんですね。それでしばらくして「もう来るなよな」と言って追い返すんです。

実に手際がいいと言いますか、ただただ感心しました。生徒指導のプロは押し引き引いたりというようなことができるのだな、と。つまり、こちらはプロのカウンセラーだと自負しているわけですが、当たり前のことです。先生方もプロの教師なんですね。

お互いにプロ同士がいかに連携していけばよいかというのを学べたのが大きかった。

—いわば「チーム学校」の先駆けですね。

学長 まさにそうです。当時、「チーム学校」の一員としてうまく活用してもらい、働かせてもらったという思いがあります。

—やはり学校だけでは解決できないことがあるでしょうし、地域の協力も不可欠だと思いますが、いかがでしたか。

派遣してくれた学校、教育委員会と院生の双方に役に立つことを

—平成二十年には教職大学院が開設されました。

学長 大学だけでなく教育界、そして私にしてみても大きな変化でした。

私はそれまで、派遣されてきた院生のことを考えて、役に立つことを教えてきたという自負があったのですが、教職大学院ができる時に、ある教員から、教職大学院は派遣した学校、教育委員会の役に立つことが大事だと言われて、そういう視点がなかったことに気がつきました。目の前の院生のためにがんばってきたけれど、その院生を派遣してくれた教育委員会のことは、ぜんぜん念頭になかったのです。それで、私自身も意識が変わりました。本学の教職大学院では、大学院生と派遣してくれた学校、教育委員会の双方の役に立つようなことを学んでもらっています。

学長 その通りです。優れた校長先生は地域のPTAの力をどんどん借りますし、当然、警察等とも連携して、地域の力をうまく活用していくんですね。

その中学校はいわゆる荒れている学校だったのですが、この学校は大丈夫だと思いました。まず先生、それから地元の保護者たちも、自分たちの出身校だからということ、みんな愛校心があったんですね。そうしたら子どももその学校が好きになりますよ。

カリキュラムを一本化

—鳴教大の教職大学院の特色について伺います。

学長 教職大学院はどこも一緒ではなくて、それぞれの大学の特色があります。本学の現職教員のための「教職実践力高度化コース」のカリキュラムは、第一に学校運営や教育課程に関わる組織とカリキュラムのマネジメント力、第二に教育活動における領域や職種間の連携、他の専門機関や地域との連携や協働により学校教育を推進するチームワーク力、第三にさまざまな教育課題を解決するための生徒指導や教科指導、学級運営などにおける教育実践力という三つの力の養成を一本化しています。

それから二年目にはそれぞれの派遣校に数カ月間戻り、課題をみつけ、その解決に向けた取り組みを行う。つまり、本学へ派遣してくれた学校、教育委員会のために働いてもらうことを含めて教師としての力量アップにつなげる。そういうカリキュラムを用意しているところが特色だと思います。

また、異校種実習をしています、たとえば、小学校の先生であれば中学校に入ってもらい、あるいは中学校の先生が小学校に入るわけです。実習期間はほんの二週間ですけど、それで今まで経験してなかった校種のことがよくわかるんですね。

——現職の先生である院生とのやりとりというのはいかがですか。

学長 先生方がまさに実践で悩んでいることを、こちらは理論で説明するわけです。あるいはこういう別の見方ができますよとか。一緒になって考えていく。そうすると先生方も理論の裏付けを得ることによって、自分がやってきたことは間違っていないかったんだと、自信を持つことができるわけです。あるいは、そんな見方があったのか、という気づきがあるんですね。

——いろいろな技法も学んでいくわけですね。

学長 そうですね。ただ、いろいろな技法はあるけれども、教師として大事なものはやはり人間としての共感性や社会性なんですね。そこを大事にしないで、技法を学びに来ましたというような人はかえってズレてしまうところがあります。

——教職大学院は当初は定員割れなどの課題もありましたが、今から振り返っていかがですか。

学長 実は本学も定員割れしていた時期があります。一つは口コミが大きかったと思っています。通常の修士課程を修了するためには三〇単位のところを、四六単位必要になるし、実習は多いし、厳しいよ、キツイよ、といった噂が流れたんですね。それが、けっこう影響したと思います。教職大学院のような

海外の現職教員に研修を行う

——平成二十五年にJICA国際協力感謝賞を受賞していますが、国際貢献・国際協力について伺います。

学長 JICA国際協力感謝賞は、オセアニア、アフリカ、中米、アジア諸国の現職教員等を「外国人受託研修」として受け入れるなど、JICAと協力して行ってきたことが評価されたものです。

——本学の教員教育国際協力センターには、理科教育協力、教員養成・研修、国際教育開発などの研究と実践を行っており、外国人受託研修や専門家派遣、現地調査研究やシンポジウムの開催など、それぞれ事業を進めています。さらに教員として国際的に活躍したい、あるいは海外に行っているいろいろな役に立ちたいというような人たちを、大学院の「国際教育コース」で養成しています。

大変なところには行きたくないと。ところが修了生が出て何年かすると、大変だけど良かった。すごく力が付いたというようなことを言ってくれるようになりました。

——それも口コミですね。

学長 口コミです。これは大きかったですね。厳しくてもそれだけのものがあるなら、がんばってみたいという人が来てくれるようになります。この二年は定員割れをしないですんでいます。

4大学の専門的知見から いじめの問題に取り組む

——BPPプロジェクト（いじめ防止支援プロジェクト）について伺います。

学長 平成二十五年に「いじめ防止対策推進法」ができ、社会全体でいじめ問題に取り組ましようと言われているのに、法律には大学の役割が書かれていないんです。

——そこで平成二十七年四月に宮城教育大学、上越教育大学、福岡教育大学、鳴門教育大学が連携協力して、それぞれの専門的知見を活かして、いじめ問題に取り組ましようというところで始めました。たとえば、ネットいじめや予防教育、さらに今年はLGBTといったことも研究テーマとして取り組もうと考えています。

附属図書館は地域との交流の場にも

—附属図書館について伺います。

学長 本学の附属図書館には、著名な教育実践家であった大村はま先生寄贈の約一万冊の学習記録や文献を集めた「大村はま文庫」、国語・教育学分野を中心とした約二万五千冊の図書を集めた「野地潤家文庫」があり、国語教育に携わる人にとっては聖地みたいなところになっています。

—図書館には児童図書室がありますね。

学長 はい。児童図書室は国立大学で初めてできたのですが、さまざまな絵本や児童文学を所蔵しているだけでなく、水曜日と土曜日には一般に開放して、近所のお子さんや保護者の方に来ていただいて、本学の学生ボランティアが読み聞かせをするなど、地域との交流の場にもなっています。平成二十四年に全国図書館協議会より「学校図書館奨励賞」を受賞しました。

具体的に進む県との連携

—地域との連携について伺います。

学長 徳島県の学力テストの成績が良くなったときに、たくさん教員を派遣していただいていますから、本学にも責任の一端があると思います。それで県の教育長とお会いして、本学と徳島県は一連托生です。学

力向上、あるいは生徒指導やいじめの問題などに一緒に取り組んでいきたいと思いますところ、協定を締結してトントン拍子に連携が進んできています。本学と県の教育委員会はずっと良好な関係でしたが、きちんとした協定をそれまで結んでいなかったのです。本学と徳島県の取り組みのユニークなところ

教員と学生の意識改革で、教員就職率がトップに

—鳴門教育大学は教員就職率で六年連続全国第一位を達成しています。

学長 実は平成十五年の教員就職率は、国立の教員養成学部・大学四八校中四四位でした。地元紙に鳴門教育大学に行っても教師なれないと書かれたこともありましたが、どれだけ良い教育をしているか、教師になりたい学生を教師にさせられないというのではダメだということ、様々な改革を行ってきました。カリキュラムも実習を重視するものにした。退職した校長先生に挨拶の仕方から面接の仕方まで指導していただいています。そして面接や模擬授業の試験官をはじめ、教員採用試験の対策に全教員が加わるようにしたのです。そうするとこの学生たちを何とか教師にさせたいというように教員の意識も変わっ

ろは、いくつかの部会を設けて、具体的に動いているということです。たとえば、どうやって学力向上につながるかということで、本学の教員をいくつかのモデル校に派遣していたり、また、いじめ問題や生徒指導についても教員に講演してもらったり、いろいろな相談を受けたり。それから県の西と南にサテライト研修室を作って研修に役立ててもらっています。あるいは、少子化について県と一緒に研究しながら、具体的な対策に取り組んでいます。

てきますし、学生の意識も変わってきたんですね。それまでは二、三年は臨時採用でいいと思っていたような学生も、現役で合格しようというところで、みんなで励まし合って県ごとに勉強会のグループをつくって勉強するようになりました。学生には入学したときから教師という仕事があればどんな仕事か、大変だけれどやりがいのある仕事かというのを一泊二日の研修で教師としての自覚みたいなものを持つようにします。やはり意識改革がとて大きかったと思っています。その意識が今も続いているわけです。

—急激に変わりましたね。

学長 本心に。

今は就職率はトップクラスになりましたので、次の段階にきていると思っています。つ

まり、「先生になれる大学」になったわけですが、学校の評判はというと、鳴門教育大学出身の先生は真面目だけど線が細いといううなことを言われることがあります。

——難しいところですね。

学長 大学四年間では短く、ある程度いたしかたないですね。ですから、卒業後もずっと経験を積んでもらって、まさに学び続ける教員として成長してってもらいたい。

学校での同僚との関係、校長との関係、子どもたちとの関係といった人間関係がある程度しっかりしていれば、成長していけると思えます。だから完成した教師を送り出すというよりも、伸びしろのある教師を育てて行

今、求められる教師像

教える自信と学ぶ謙虚さ

——今、求められる教師像についてお考えを伺います。

学長 一つは、まさに学び続けるということが大事だと思っています。その学び続ける教員を養成するために何が大事かというと、「教える自信と学ぶ謙虚さ」を持つことだと思っています。今、教師が学ばなければならぬことはたくさんあります。英語やICTや特別支援教育等々、先生方は大変ですけれども、そういう最新のことを学んでもらわなければなりませんし、あるいは教養も求められますし、社会や世界にも広く目を向けなければいけない。そういう大変な時代ですけれ

きたいと思っています。

そのためにも、その人に魅力があるということが大事だと思っています。鳴門教育大学出身の教師は何か人間的魅力があるなどと言われるようにしたい。でも、無理に魅力があるように振る舞ったり、魅力のある授業をしようなどと焦ってはいけません。魅力的な授業や魅力的な人格を目標にしながら、まずは子どもが面白いことをしていたり楽しいことをやっている、あるいはつらかったり悲しんでいたりする、そういうことに気づく教師になってほしいですね。それが将来、魅力ある教師へと成長することにつながっていくと思っています。

でも、それでも謙虚に学び続けてほしい。それから、二つ目は不易と流行みたいなのがあって、教育というのは不易の部分がとても大事だと思っています。たとえば、「ドラえもんといじめ」という冊子をつくってスクリーンカウンセラー先子どもたちや保護者に配っていたんですけど、藤子F不二雄の『ドラえもん』に出てくるジャイアンとのび太の関係を見たときに、あれ？ と教師は感じなきゃいけないと思うんですね。何かおかしいぞ、と。そういう「感じる心」というのが大事だと思っています。

三つ目は同僚との関係ですけど、これから

の教師はチームワークでやっていかなければなりません。いじめの問題もそうですし、自分の得意なところは手を貸したり、逆に苦手なところはフォローしてもらったり、助け合えるような教師を育てたいと思っています。

信頼関係を基に学長が自ら動く

——学長のリーダーシップと大学運営について伺います。

学長 本心に厳しい時代ですね、今。教員養成系大学だけでなく、国立大学はどれも厳しいです。ですから、まずは、とても厳しいという現状をみんなに認識してもらおうと情報を集めて一生懸命に伝えています。

そのときに思うのは「信なくんば立たず」という孔子の言葉です。民の信がなければ政治はやっていけない。その通りだと思わなくては。学長も同じです。教員とのお互いの信頼関係を基にしながら、学長は今、先頭に立って明るく前向きに動かなければいけない時代だと思っています。先頭を切ってトップセールスを行う。リーダーシップというのは、要するにパフォーマンステナンスとメンテナンス、課題達成と人間関係の両方が大事だというPM理論に行きつくと思っていますが、今の学長はまさに自ら動かなければいけない。そしてそれを教職員も見つけていると思うんですね。これだけ厳しい状況ですから、チームワークよく、明るく前向きに、をモットーにやっていきたいと思っています。